

四月の記憶

チャン・ダン・コア

私はブイ・クアン・タンに会った日を、今でも覚えている。彼は1975年4月30日の昼、独立宮殿¹の屋上に軍旗を立てた人である。道の埃と硝煙に染まった、半分が赤く半分が青いその旗は、平和を表わす鳩の両翼に変わった。そしてそれこそが、抗米救国戦争の勝利の終点であった。私はブイ・クアン・タンに、旗を立てたことについて尋ねたいと思った。ところが彼は、1人の死んだ人について、悲しげに語ったのである。それは、ゴ・ヴァン・ニョーであった。ブイ・クアン・タンを通して、私はゴ・ヴァン・ニョーが、フオンザン兵団203旅団第1戦車大隊の大隊長の大尉であったと知った。4月30日午前7時、ゴ・ヴァン・ニョーの指揮する第1大隊は、サイゴン橋に進撃した。それは、サイゴンービエンホア高速道路上にある986メートルの長さの重要な橋で、我々の進攻の銜先の枢軸であった。そのため、敵は必死に防御した。敵は14台もの戦車と装甲車、歩兵中隊2隊を動員し、橋の防衛に配置した。さらに飛行機が爆弾を注ぎ、戦艦が川から射撃して援護した。敵の戦車3台が、橋の真上で遮っていた。他にも数台の戦車が、地面の低いところに隠れ、橋の方に向かって砲身をもたげている。彼らはそれらの戦車を、地中トーチカ、地上トーチカ、移動トーチカにして、断固最後まで固守し、何としても我々の進攻の銜先を遮ろうとしていた。橋はとても長い上に、アーチ型をしていた。そのためわが戦士たちは、敵を観察することが、特に橋の向こう側の戦車を観察するのが、非常に難しかった。一方、敵の方はいともたやすく、我々を発見した。先頭を進んだ我が方の戦車3台が、撃たれて炎上した。炎はすさまじく燃え上がった。鉄の焦げるひどい臭いがした。戦闘は激烈に行なわれた。敵がどこにいるのかもわからず、わが方のどの戦車も、突出しては敵に撃たれて炎上するものがほとんどであった。ゴ・ヴァン・ニョー大隊長は、戦車の蓋を押し上げ、真暗な弾雨の中に身をすっきり乗り出し、敵を観察し、部隊を指揮して、橋を渡ろうとした。「サイゴンをめざそう！進め！」それは、焦げ臭い硝煙の中の、彼のかすれた叫び声であった。それはまた、この世で響いた彼の最後の声であった。全大隊は一気に橋を渡り、戦車の砲塔の上に突っ立った指揮官の号令に従って、進撃しながら敵を倒した。その後、連絡が途絶えた。しかし兵士たちにはまだ、ゴ・ヴァン・ニョーが砲塔の上に半身を突き出して立っているのが見えた。彼は大隊が進撃するのを指揮し続けていた。号令をかけて指揮していた。ゴ・ヴァン・ニョーが橋の上で戦死していたと、誰が思っただろうか。AR15銃の一発の弾丸が、彼の額に命中していた。しかし、戦車の戦士たちは、彼が指揮していた戦車の中の、彼のそばにいた兵士たちさえもが、彼が戦死したこと、砲塔の上に立ったまま死んだことを知らなかった。彼らは、彼の号令に従い、彼の影に従って進撃し続け、目標を次々に倒していった。ゴ・ヴァン・ニョーはそのようにして、まさに完全勝利のその日に、サイゴン市内に入ったのであった。まさにその歴史的瞬間に、彼と結ばれていた間ずっと従順で、彼がすでにこの世にいなくなっても彼に貞節だった妻が、キンバック地方²のある小さな村で出産しようとし

1 [訳注・以下同様]ベトナム共和国大統領官邸。

2 キンバック（京北）とは、史跡の多い現バクニン省の雅称。ロアンのいたヒエップホア県は、現バクザン省であるが、当時はバクニンとバクザンがハバック省として統合されており、またヒエップホア県はバクニンに近いので、キンバック地方とし

ていたことを、彼は知らなかった。そして彼の血の最後の一滴であり、炎の地クアヴィエト³での彼女との唯一の記念である男の子が、この世に生まれた。それは、再会の日の彼の出現であった。そして、大隊長の息子で、父の戦死した日に生まれたゴ・ヴァン・ヴィエトは、今では20歳になった。ヴィエトが満18歳になった年、彼の若い母であり、烈士ゴ・ヴァン・ニョーの妻であるロアンは、夫の部隊であった203連隊に息子を連れて行った。「私にはこの一滴の血しか残っていませんが、それはニョーの血の滴でもあるので、私はこの子をあなた方に託します。この子が父親の後を継げるように、昔の父親のような戦車隊員になれるようにしてください……」

パイ・クアン・タンの話のままに、私は203連隊に行ってみた。

「ヴィエトに会いたいのですか」

前身が203旅団である203連隊の連隊長グエン・ヴァン・トンは、にこやかに私の手を握った。

「彼はもう下士官です。夜、あなたに会いにここまで来るように言いましょう。とてもハンサムな子です。父親に似てハンサムで、広い額がそっくりです。あの子は、大隊の大事な子なのです。誰もが彼を可愛がります。パイ・トゥンさんが私に手紙をくれたところです。トゥンさんのことは、きっと知っていますね。彼は元旅団の政治委員で、グエン・ヴァン・テさんと一緒に、ズオン・ヴァン・ミン大統領を逮捕した人です。今彼は退役して、ずっとサイゴンにいます」

そう言って、グエン・ヴァン・トンは私にパイ・トゥン政治委員の手紙を渡した。

トンさん、革命の成果を防衛しているあなた方すべてに挨拶させてください。トンさんはヴィエトをしっかり助けてやってくださいね。私はあの子が可愛くて仕方ないのですが、どうすればいいかわかりません。今年年取って身体も弱り、その上退役してしまって、あの子を助けることができないので、すべてトンさんをお願いします。トンさん、あの子を可愛がってください。可哀想に、あの子には生まれたときから父親がいないのです。ニョー君のことを思って我々にできることは、あの子を養育し、成長させるようにすることだけです……

「トゥンさんはずっと私に手紙をくれます。どの手紙にも、ヴィエトのことが書いてあります。あの子についての話はとても長いのです。作家には小説が書けるほどですよ。おそらく映画が1本作れるでしょう。私も少しは知っていますが」

「もしかして、あなたもニョーさんの部隊にいたのですか」

「はい。ニョー君は大隊長でした。私はその時、偵察小隊の副隊長だったのです。私の主な仕事は、敵の状況を探って上部に報告し、上部が状況を把握して処理の方法を見つけるようにすることでした。私の一生でおそらく、あれほど強く美しい愛を見たことはないでしょう。そしてその愛の結果が、今は私の兵士であ

たと思われる。

3 17度線のすぐ南にあるクアンチ省の地名。

るヴィエトの誕生なのです」

「何か話していただけますか」

「もちろん私の知っていることは、それほど細かくはありません。私の任務は偵察でしたが、敵の偵察であって、我が方の偵察ではありませんから。ニョーさんがロアンさんと故郷でどのように愛しあっていたのかは、私ははっきり知りません。でもロアンさんがクアヴィエトまでわざわざ、夫を探しにやってきた日のことは知っています。私が始めに彼女と会ったのです。彼女は私に挨拶しました。その時彼女はとても若く、また美しかったのです。丸顔で、肌は白くきれいでした。黒い絹のズボンと青紫色の上着を着ていて、片手で菅笠を胸の前に抱え、片手は布の袋を下げ、足にはゴムのサンダル—軍隊の型のゴムのサンダルを履いていたのを、今でも覚えています。彼女を見て、私はすぐに農村の人だと思いました。尋ねてみると、そのとおりでした。彼女は、ハバック省⁴ヒエップホア県ドウクタン社⁵の人でした。農村の人はいつも、濃く深く、激しく愛するものです。どれほど強く愛せば、わざわざ戦場までやって来るでしょうか。クアンチ省のクアヴィエトは、当時燃えさかる戦場でした。敵が四方に駐屯していました。不慣れた土地で、うっかり敵の地に入りこみ、敵に道を尋ねようものなら、命を落としてしまいます。だからニョーさんに、彼の妻が訪ねてきていると言っても、彼は信じませんでした。信じられるわけがありません。彼は私がだまして、からかっていると思い、どうしても迎えに行きませんでした。ロアンさんは、ニョーさんの塹壕まで手探りでやってきたのです。その時彼は初めて呆然としました。本当に妻だったのです。100パーセント本当でした。結婚したばかりの妻でした。そこで私たちは、あわただしく、2人のための幸福の部屋を用意しました。幸福の部屋といえば聞こえはいいですが、実際には、覆いのついた壕で、夫妻がしばらく滞在するようにと仲間たちが譲って出て行ったものでした。当時戦場に、ゲストハウスなどあるわけがありません。でも戦場を口実に、暮らしが乱雑になったり、なおざりになったりしてはなりません。私たちは壕をパラシュートの布や、新聞紙で装備し、それからひそかに係を決めて注意深く警護し、壕の屋根に葉を押ししました。それは、「軍事機密」を示す印でした。ある者はさらに、壕の入り口に立てた砲弾に、「極秘軍事区、立入禁止」と走り書きしました。我々は、我々のゴ・ヴァン・ニョー大隊長と、その若く美しい妻が、もっとも激烈な戦闘に入る前に、本当に穏やかで安らげる時を持てるようにと望んだのでした」

II

戦車隊員のゴ・ヴァン・ヴィエトは、あの1975年の春に生まれた。彼が生まれた年は、歴史的迅速作戦の年であり、彼が誕生した日は、同時に、大隊長であり、英雄の名簿には載っていないが、英雄的な戦車兵であった彼の父が死んだ日であった。その若い兵士は、今私の前に、恥ずかしそうに坐っていた。私は黙って彼を見つめ、彼の中に、死んだ勇敢な大隊長の面影や特徴が少しでもあるかを探そうとした。彼は私が想像していたよりも若く、思っていたよりもハンサムであった。ハンサムと言うのは、間違いかもしれない。正しくは、可愛いのである。髪は黒く艶やかで、やわらかに波打っていた。肌は白くきれいだっただ。赤く濡れた唇は、一筆で描いたように整っていた。両頬は紅をさしたように赤かった。見た目は、年頃の少女の外見であった。彼は机の縁をもてあそびながら、囁くような声で私たちに答えた。それからにはかんで笑った。そして、新聞記者の「伯父さん」の細かい質問に答える代わりに、自分の母と父方の祖母を訪ねるように、

4 ハバック省は1996年にバクザン省とバクニン省に分割された。ヒエップホア県はバクザン省に属する。

5 社(サー)は、ベトナムの末端行政単位。自然村をいくつか集合させたもの。行政村。

「伯父さんたち」を故郷へ招待すると言った。その祖母は、3人の息子が烈士であり、国家から、「ベトナム英雄の母」⁶の称号を贈られたばかりであった。

III

雑誌『軍隊文芸』の軍用車は、大きな穴のあいたでこぼこの赤土の道を通り、ハバック省ヒエップホア県ドゥクタン社まで、我々をガタガタと連れて行った。作家のゴ・ヴィン・ビンのほかに我々と一緒に行くのは、ゴ・ヴァン・ヴィエト下士官と連隊の政治主任のグエン・マイン・ホン少佐であった。ドゥクタン社に着くと、我々は診療所に立ち寄り、ロアンを探した。連隊長のグエン・ヴァン・トンの言葉どおり、ロアンは、今では年配に近づいたとはいえ、まだ若くて美しかった。農村では、50歳の女性は老女のように見られていた。しかしロアンはまだ老女の様子は少しもなかった。ニョーが戦死した年、彼女はまだ28歳で、それからずっとそこに住んでおり、再婚しなかった。人生の春は一度しかなく、人の一生も一度しかない。天は彼女に損失を与えたが、なぜ、さらに苛酷にも、ありあまる容色を与えたのであろうか。損失を埋めるためであろうか。その容色をもってすれば、彼女は支度をととのえて、新しい旅に出かけることができたであろう。絹に覆われた道がどれほど、彼女の眼前に広がり、彼女が足を置くのを待っていたであろうか。なぜ彼女は望夫の女⁷となって、立ち続けていたのか。この国にはどれほど、そんな望夫の女がいることか。彼女の夫の母であるスウの家だけでも、2人の望夫の女がいた。しかしその濡れた眼の光、象牙のようなきめ細かい肌は、石になどなりはしなかった。

「実際とても多くの方が、私のところに来たがりました。その中には、ニョーと同じ部隊だった人たちまでいたのです。彼らは私をととても思ってくれました。ニョーのために、私と子どもを思ってくれる人もいました。彼らはニョーに代わって、子どもと私の面倒を見ることを許してほしいと言いました。でも私は、義母と子どもがいとおしく、ニョーのこともさらにいとおしかったのです。誰も彼の代わりになることはできません。彼らがとてもよい人たちで、心の底から私を思っているとしても。でも、ニョーではない別の男性のことを考えるたびに、内臓が締めつけられるようでした。私が再婚したらどうでしょうか。義母は、すぐに賛成するでしょう。義母もそれとなく何度も、私を再婚させるつもりがあることを示しました。でも、まさに義母が私をすすんで再婚させようとするからこそ、私はそうできなかったのです。もしそうしたら、義母をととても苦しめるからです。義母はすでに息子をなくしたのに、嫁まで失うのです。子どももそうです。すでに父をなくしているのに、今度は母を失うのです。母はまだこの世にいるのに。そう考えると、私は再婚することができませんでした。人間であるということは、とても難しいのですね。私の義姉もそうでした。ニョーの実兄のドンさんの妻です。ドンさんは中佐で、連隊の政治委員だったときに戦死しました。その時義姉はまだとても若く、幼い女の子が1人いただけでした。それから義姉も、今までずっとここにいて、おばあさんになってしまいました。ニョーの実弟のハオだけは、22歳で戦死し、まだ一等兵で、結婚するひまもありませんでした。もし彼が妻を娶っていたら、おそらくうちには、もう1人寡婦が増えていたでしょう……」

「きっとあなたは、普通学校⁸のときからニョーさんを愛していたのでしょうかね」

6 民族解放・祖国防衛に積極的に貢献した母親に贈られる英雄称号。残された老母の戦後の困窮が問題になり、1994年国会で制定された。戦死した子どもの数や、一人っ子かどうかで等級が決められ、住居や給付金も与えられる。

7 妻が帰らぬ夫を待ち続けて、ついに石になったという伝承をさす。

8 日本の小学校・中学校・高校に当たる。ベトナム戦争当時の北ベトナムでは、4・3・3の10年制であった。

「いいえ、普通学校のころは、ニョーは私のことを全く知りませんでした。彼は私より10歳以上年上なのです。彼が入隊したころ、私はまだ幼く、まだ学校に行っていました。それから私は社の青年運動に参加しました。そのころは戦争で、困難で危険で、さらに飢えていましたが、とても楽しかったのです。毎晩集まり、団体活動をして、歌を歌い、それからパーサンサン運動⁹、バーダムダン運動¹⁰がありました。そして救急活動、救援活動、爆撃の穴埋め、砲撃地まで弾薬を運ぶ活動がありました。それからチュオンソン山脈への突撃¹¹です。どの日も人でいっぱい、騒がしく行き来していました。大きな道路には、出陣する軍隊がどこまでも続きました。どの青年も若く見えました。彼らは歩きながら、勇壮な歌を歌いました。それから、道を自転車で走ったり、水田で田植えをしたり、草取りをしている若い娘たちに、からかいの言葉投げました。「ぼくを待っていてね。ぼくは帰ってくるから」「ねえ君、ぼくのことを覚えて、待っていてね」その青年たちのうち、帰ってきた者がいるでしょうか。ある晩、私たちは、ニョーさんの家の庭に集まりました。数人の娘たちがつねりあい、スウ母さんの嫁になろうと争いました。「お母さん、私たちはここに一列に並ぶから、お母さんの気に入った人に印をつけてください！」「お母さん、私を優先してくださいね。私は基本階級¹²です！」「いいえ、私の方がもっと基本です。私は烈士家庭です」「お母さん、もうすぐニョーさんが休暇で帰ってきたら、私を彼と結婚させてくださいね！」そうです、そのように、わめきちらしていました。どの娘もよくしゃべりました。でもどの娘もニョーさんの顔を知りませんでした。ふざけすぎて、本当になってしまいました。ニョーさんが休暇で帰ってきて、突然私の家にやってきたのです。私は彼を見て驚きました。最初私はどこかの兵士が、竹をもらいにきたのだと思いました。その人が頼むときに恥ずかしい思いをしないようにと思って、私はすぐに言いました。「うちの竹はあそこの藪です。どれでも気に入ったのを切ってください。社会主義の竹ですから」彼は恥ずかしそうに笑いました。「いいえ、竹をもらいにきたのではありません。ぼくの名前はニョーです。ラムとスウの息子で、ドンの弟です。一週間の休暇で帰ってきましたが、母が君と君の家族を訪ねるようになっています……」そうです。彼はそれだけしか言えず、顔を赤くしました。両手はかわるがわる、ボールを回すように、鉄兜を回していました。それから彼は行ってしまいました。数週間後、私は手紙をもらいました。1973年の中頃になって、やっと彼は休暇で帰ってきました。私たちはその短い休暇の間に結婚しました。その年、義母が家を建てました。工事はとても大変でした。家の地盤固めも終わらないうちに、彼はまた行ってしまいました。そしてそれ以来、彼はもはや帰らなかったのです……」

「あなたが彼を訪ねて行ったのはいつですか」

「1974年中頃です。夫の父が、私に会いに行くように勧めたのです。義父は変わった人で、めったに話さない人でしたが、非常に子どもを愛していました。子どもが戦死したという知らせがあったとき、義父は石になったように、ずっと坐っていました。表情に何の変化もないかのようなようでした。家でドンさんの法事

9 ベトナム労働党の青年組織であるベトナム労働青年団が1965年初に発動した青年動員運動。パーサンサンとは「3つのすすんで」という意味で、「すすんで入隊し、すすんで生産を推進し、学習し、すすんで祖国の必要とするどこへでも行き、どんな仕事でもする」という内容。

10 女性大衆組織であるベトナム女性連合会が1965年3月に発動した女性運動。バーダムダンとは「3つの担当」という意味で、入隊する男性に代わって、生産・家庭・戦闘（防衛）の3領域を女性が担当するという内容。

11 ベトナム労働青年団は、パーサンサン運動の一環として、1965年6月に抗米救国青年突撃隊を組織したが、その主な任務は、チュオンソン山脈に、北部と南部を結ぶいわゆるホーチミンルート（北緯17度線）を建設することであった。隊員の過半数は若い女性であったといわれる。

12 労働者・貧農・雇農階級出身者をさす。

を行っていたときに、社がハオの戦死の知らせを持ってきたのを、今でも覚えています。社の人たちは、家で法事をしているのを知らなかったのです。義母はすっかりショックを受け、もう少しで倒れるところでした。一方義父は平静でした。平然と茶を入れていました。手が少し震えていました。でも表情は、何もなかったかのように、落ち着いていました。それから、「あの子はどこをやられたのだ。あの子を殺した弾はどこから来たのか。前からか、それとも後からか」とだけ尋ねました。私はなぜ義父が、そのことにしか関心がないのかわかりませんでした。ニヨーも含めて、義父の子どもたちはすべて、前方からまっすぐ撃ってきた弾に倒れたのでした。息子が戦死しても、義父はいつもそのように、何事もなかったかのように、平静でした。そして夜中になるのを待って、家中が眠ってしまうと、義父は初めて寝台にもぐりこみ、布団を被って一人で泣くのでした。私がニヨーを訪ねたのも、義父のおかげでした。義父は「私はもう年老いた上に身体が不自由なので、あの子に会いに行けない……」と言いました。（義父は1972年に自転車で転びました。家が貧しく、年中飢えていて、治療費もなかったので、障害が残ってしまいました。義父はよろよろ歩き、とても大変でしたが、最後には寝台に寝たままになり、死ぬまで寝たきりでした）「あの子のところに行きなさい」義父は私に勧めました。「もうすぐきっと大きな戦闘がある。今度の行軍で、あの子はもう帰らないかもしれない。あの子は私の息子だ。父親にはわかる。何とかしてあの子のところに行って、あの子と少しでも一緒にいなさい」私が躊躇しているのを見て、義父は言いました。「金がないのか。家には値のつく水牛が1頭残っている。いいから、私が売って金を作ろう。あの子のところに行きなさい」少し考えて、義父は言いました。「私は嘘をつけと言っているのではないが、この場合は本当のことを言うてはいけない。もしあの子に会ったら、家には食べるだけ十分にあると言いなさい。私も病院に行って、足を治すことができ、治療に金がかからなかったと言いなさい。それから忘れずに、この瓦葺きの家のことを話して聞かせなさい。立派な家で、家の中には足りないものはないと言いなさい。少しぐらい言いすぎてもかまわない」そして私は荷物をまとめて、出かけたのです……」

彼女は話を止めた。一陣の冷たい風が吹きぬけたかのように、丸い両肩が静かに震えた。私は彼女の顔を見る勇気がなかった。私は彼女の職場でもあり、主な住まいでもある部屋を見回した。部屋は簡素で、何の設備もなかった。1台の大きな戸棚が遮るように置かれ、薬を収納するとともに、1枚だけの花ござを敷いた1人用の寝台を隠す衝立てにもなっていた。外には、底を露わにし、竜眼の落ち葉で溢れた溜め池がひとつあった。診療所は全く人気なかった。

「なぜあなたは、ニヨーさんが戦死した日から、家にいないで、ずっと診療所に住んでいるのですか。ここは診療所とは言っても誰1人いません。もし運悪く風邪をひいたり、何かの病気になったりしたら、特に真夜中など……」

私は、部屋中を覆う重い雰囲気を追いかけておもうとして尋ねた。

「家にいることはできないのですよ。ニヨーの家にいると、どんな物も彼を思い出させます。家はあとで建ったものですが、昔の土地の上に建っています。家の叔母や叔父や兄弟たちは、私をととても思ってくれて、私のために1間を別にしてくれました。でも1人でいると、とても恐いのです。家はがらんとしています。1人足りないと、すべてが足りなくなるのです。ヴィエトが入隊した日から、私はここに移ってきてしまいました。ここにはとにかく人がいて、寒さを減らし、少しでも悲しみが消えるのですよ……」

そう言ってロアンは立ち上がり、戸を閉め、当直の看護師にいくつか指示を出すと、私を連れて家に急いだ。

ニョーの家は、村の奥にあった。それは1973年から建っている、3部屋の瓦葺きの家であった。瓦屋根は竜の鱗の形をしていて、雨と日差しですでに黒ずんでいた。家は暗く静かで、寒そうで、教会のある一区画のように森閑としていた。今は73歳のスウが、末の息子と一緒に住んでいるだけであった。彼女は1部屋すべてを、戦場で死んだ3人の息子を祀るのに当てていた。1つの祭壇に3つの線香の鉢と、3人の息子の写真が集められていた。初めに1973年に戦死した、連隊政治委員の中佐ゴ・ヴァン・ドン、次に1968年に戦死した一等兵のゴ・ヴァン・ハオ、最後に1975年4月30日にサイゴンへの要路で戦死した、戦車大隊長で大尉のゴ・ヴァン・ニョーである。

ロアンは我々を義母と話させておいて、きびきびと庭を掃き、家を片づけた。彼女を見ると、1人の従順な嫁の、機敏でしとやかな様があった。この20年以上、彼女はそのような嫁の役をするのに慣れていて、夫のいない嫁であったが……。

「私はニョーが可哀想です」

スウの声は沈んだ。

「家は貧乏でした。子どもたちの誰も、普通学校を修了できませんでした。ニョーも7学年を終えただけで、軍隊に入りました。その前は、弟を養う金を稼ぐために、働きにも行っていました。軍隊に入って、1か月5ドンの給料をもらおうと、私を助けるために、使わずに送ってくれました。結婚するために休暇を取って帰ってきたとき、私はこの瓦葺きの家を建て直していました。その前は、瓦葺きの家で、雨も降らないうちに雨漏りし、風も吹かないうちに寒くなっていたのです。あの子が帰ってきた日、家はもう解体していて、その夜、雨で寒かったのに、あの子は庭で寝ていました。今、あの子がここに帰ってきて、家は立派になったのに、あの子はずっと外の庭で寝なければならず、家に入ってくることはできません。可哀想に。あの子は、瓦葺きの家には住めない運命なのです。家は今でもこんなに広い、こんなに暖かいのに、あの子は外のあの庭で、露と風に当たったまま横たわっていただけないのです……」

母は手拭いを取って涙にひたし、それから静かに、開け放った窓の向こうを指差した。そこは広い庭だった。パイナップルの畑の背後に、数本の白欖柳の木が、霧のような小糠雨の中に悄然と立っているのが、この家の烈士の墓地であった。そこには、テト¹³を機に建てられたばかりの4つの墓があった。家の3人の勇敢な息子全員が、そこに運ばれ横たわっていた。3人の息子の墓のそばには、軍服を纏ったことはなかったが、革命の兵士であった老兵の墓があった。それはゴ・ヴァン・ラム老人で、数年前に亡くなったばかりであった。

「お母さんは、ニョーが戦死した知らせをいつ聞いたのですか」

「あの子が死んだその日にわかりました。その日は4月30日でした。ラジオがサイゴン解放のニュースを知らせました。村中がテトのように喜びました。夕方には大雨が降りました。水が堰から溢れました。息子がとてもたくさんの魚を捕まえ、夜にはお祝いのご馳走をするつもりでした。でも私は、桶に入れておいて、息子のニャットが帰ってくるのを待って、家族がそろったら食べようと言いました。ニャットはその日、

13 旧正月。ベトナム人にとってもっとも重要な祭日。

ハイフォンのあたりまで出かけていたのです。そしてその夜、私は寝ていて夢を見ました。ニョーが顔を血だらけにして帰ってくるのを見たのです。あの子は2人の兵士と一緒に帰ってきました。私は食事をするように引き止め、家には弟の捕った魚があると言いました。でも誰も食べようとしませんでした。兵士たちはすぐに出発するように言いました。ニョーは何も言いませんでした。私はニョーに、どうかしたのかと言いました。どうして何も言わないのかと。兵士たちが、ニョーは頭に怪我をした上に、圧迫されて正気を失い、話せないのだと言いました。ニョーは立ったまま、私をじっと見つめました。それから泣きました。涙に血が混じっていました。そこで私はぱっと目が覚めました。そのときロアンはヴィエトを産んだところでした。ロアンのお母さんもここにいる、孫の世話をしていました。私はロアンに何も言いませんでしたが、お母さんに言いました。「もしかしてニョーは死んだかもしれません。あの子が頭を撃たれたのを見ました。きっと死んでしまったのでしょうか」そして翌日ニャットが帰ってきましたが、その顔が青ざめていました。私は「お前、病気になるのかい」と尋ねました。ニャットは何も言いませんでした。夜になって、ニャットは台所の裏に出て、しくしく泣いていました。私が問いつめると、ニャットはやっと話しました。ニョーが死んだということです。新聞に載っていたのです。ハイフォンに行って、ニャットは『ニャンザン』¹⁴を買いました。5月1日号でした。どこを見ても赤い字がありました。新聞には、記者がサイゴン橋の上のニョーの戦闘について書いた記事があって、ニョーが戦車の上で死んだことがありのままに書いてありました。新聞記事には、レ・チョン・タンさんがニョーについて語った言葉までありました。でもニョーだとは書いていなくて、第1戦車大隊の大隊長ゴ・ヴァン・Nとだけ書いていました。第1大隊の大隊長とはまさにニョーの大隊長です。ニャットはそう話しました。そして数日後、私はトゥンさんからの手紙を受け取りました。それからトゥンさん本人が、ここに来ました。トゥンさんは私にラジオを1台、ロアンにミルクを12缶くれました。あれほど情義のある人がいるのでしょうか……」

「それではお母さんは、ずっとトゥンさんに会っているのですか」

「いいえ、あの人はサイゴンに行ったままだそうです。とても遠いです。ニョーの部隊の人たちならいつも訪ねてきます。毎年必ず来ますが、今ではヴィエトよりもよく訪ねてくるときがあります。ヴィエトは父親に瓜二つです。とても勇敢です。で、お前は どうして女好きの男みたいにぼんやり坐っているんだい、ヴィエト。立ってお父さんに線香を上げなさい。ドン伯父さんとハオ叔父さんにもね……」(1995年記)

【片山須美子 訳】

14 ベトナム労働党(現ベトナム共産党)機関紙。